

「かぜと友だち」について

福田 今度おつくりになられた「かぜと友だち」について伺いたいと思います。この曲は小野先生のはじめての童謡ですね。

小野 はい。1996年の三月末だったと思いますが、安尾先生のご紹介で渡辺先生にお会いし、私の詩集をお贈りしたところ、四月はじめに、渡辺先生が、私の自宅に送ってくださった曲が「かぜと友だち」でした。

私にとっては、メロディーがついたのはじめての詩です。私は楽譜が読めませんから、娘にピアノをひいてもらって、娘といっしょに歌いました。何しろ詩の心とびたりの曲でうれしくて、何回も歌ったことを覚えています。

安尾 この「かぜと おはなし ヒューヒューヒュー」というメロディー、私は大好きなんです。渡辺先生はどのようなお気持ちで作曲されたんですか。

渡辺 「かぜと友だち」の詩をみて、昔、羽織を着ていたころを思い出したんです。羽織は、風がふくと、背中部分がまくれて船の帆みたいになるんです。それで得意になって歩いたり、風がふくと「うわー」ってそっくりかえったりして。そういう子どものときのことを、頭の中で思い出しながら作曲しました。

詩を読んでいくと、何となく感じるものがあるわけです。それを楽譜に書きつけていくんです。歌いながら音符に書いて、気にいらぬ部分はまた直して。ここはもう少し音をあげてった方がいいとか、ここはさげた方がいいとか、静かにした方がいいとか。

福田 ピアノはお使いになられないんですか？

渡辺 そうです。私は作曲のときは、ピアノは使いません。ピアノは前奏、伴奏を書くときにだけ使います。

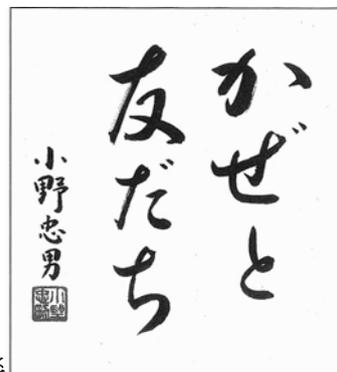
小野 作曲のときは先生が歌ってつくるんですね。

渡辺 そうです。作曲するとき、楽器にはあまり頼らないようにしています。歌うのは楽器ではなくて人間ですから。人間が歌えなくてはしかたがありませんから。

「なのはなだって」の部分のメロディーを例にとるなら、ここは「ラーソファーソドーソ」なんです。ファが半音あがっています。これは「歌ってみて自然に歌えるのがファを半音あげた音だ」とわかったからなんです。

小野 最初からピアノを使って作曲すると、楽器に影響されてしまって、人間のもつ自然な発声がかめなくなるということですね。

渡辺 要するに言葉を生かすこと。そしてその中で全体の変化をつけていくわけです。「統一と変化」、それをいつも考えています。



小野忠男氏 直筆の書

安尾 この曲には、ちょっとジャズ風なアレンジもありますよね。

渡辺 「とーもだち」と平板に歌うよりも、「ともーだち」と、「も」にアクセントをつけた方が、風と友達という感じがすると思いましたので。

「かぜと おはなし ヒューヒューヒュー」についていうなら、「ヒューヒューヒュー」という部分に注目したんです。「ヒューヒューヒュー」という風は、「ヒュー〜」と長く、強く吹いている風とは違うわけです。「ヒューヒューヒュー」は、軽やかに、楽しそうに吹いているイメージです。ですから、テンポを遅めに作曲してしまうと、「ヒューヒューヒュー」の感じにならないんですよ。

小野 「ヒューヒューヒュー」という詩から、全体が決まっていたわけですか。

渡辺 そうです。作曲するときには、歌全体のバランスにも気を配らなくてははいけませんから。納得するまで何曲もつくって、歌ってみるわけです。その日だけではなくて、明日になったらまた歌おう、あさってになったらまた歌おう。

時間をおくと、「ちょっとこれ不自然だな」とか、「おもしろくていいな」とか、感じ方も変化しますからね。最後の最後になって決定するわけです。

安尾 こうやって楽譜を見せていただいて思うんですが、渡辺先生は「詩をみて、そのままつくる」とおっしゃっていますけれど、音楽の理論からみても大変よくできたメロディーになっているんですよ。メロディーの下に和音が、ずうっと流れていて、エコーの効果もはいています。とってもきれいですよね。メロディーの強弱もありますし。

音楽の理論にもとづいた技術がちりばめられていながらも、それがうきあがらず、ごく自然にメロディーにとけこんでいるのが、渡辺先生の曲のすごい点だと思います。

小野 理論を考えることをしなくても、もう身についていらっしゃるんですね。

渡辺 そうですねえ、詩を読んでいるとだんだん曲ができてくるんですよ。はじめは黙読して、そのうちに声にだして読みはじめるんです。「かぜは みんなの 友だち」「かぜは みんなの 友だち」・・・ではここは変化をつけよう、ここは山にしてもってこようとかあれこれ考える。作曲上のいろいろなテクニックも加えていくわけです。

安尾 この曲の場合は、最後の「かぜの友だち、友だち」の部分に山がきているわけですね。

「かぜと友だち」の楽譜（渡辺茂氏 直筆）

渡辺 そうです。詩によっては盛り上がりが真ん中にきて、あとは沈静して、静かに終わるという場合もあります。その詩によって盛りあがりの場所は変わりますから。

小野 この「かぜと友だち」の曲はすごく自然で、無理がないですよ。言葉にあってるというか、この詩にはこの曲しかないように感じてしまいます。やはり何回も何回も読むという先生の作曲方法から生まれているからなのでしょうね。

渡辺 そういつただけとうれしいですね。

「読む」ことによって、言葉のアクセントの問題も自然に解決することが多いんです。「風」は「かぜ」ではありませんよね。ですから「か」にはアクセントとなる高い音をつけることをさける。「ともだち」もそうです。「ともだち」にならないように気をつけます。

「なのはなだって」の「だって」というのは逆にアクセントが必要なんです。「だって」という言葉は普通にしゃべっていてもアクセントがくる部分ですから。この部分は、アクセントをつけずに平板に歌ってはつまらなくなってしまうんです。ですから、「なのはなだ[・]って」と、「だ」にアクセントをもってくる。そして最後の部分では、「みんなかぜの友だちなんだよー」という、この詩全体を通して伝わってくる、明るいイメージがばあっと広がるようなメロディーをめざしました。

福田 小野先生は、この詩をどのようなお気持ちで書かれたんですか？

小野 子どもといっしょにいるとかぜも生き物で、ただふいているだけではなくて、話しかけてくるように感じるんです。「かぜと おはなし ヒューヒューヒュー」という言葉は、大人にとっては不自然かもしれないけれども、子どもにとってはまったく自然なんですよ。「なのはなだ[・]って、たんぼぼだ[・]って」ちょうも木々のはも、もちろん人間も、みんなみんな友だちなんだという気持ちから、この詩は生まれたわけです。子どもたちといると、ふとそんな気になって楽しくなるんですね。

渡辺 そうですね、雨がふったって、それは憎らしいんじゃないかと、「あ、雨がふってきた。家の中で遊べるぞー。」と思う。

小野 子どもたちの世界は、大自然ともすぐに友だちになれる明るくてすばらしい世界ですよ。大人の私たちも、子どもから学ぶことがたくさんあるような気がします。